

平成28年度 第1回六戸町総合教育会議 議事録

期 日 平成28年8月22日（月）

場 所 六戸町立図書館会議室

案 件

議 事 六戸町教育大綱について

議 事 教育大綱の具現について

意見交換

平成28年8月22日（月）

- ・開会午後3時00分
- ・閉会午後4時15分
- ・出席者の氏名  
吉田豊（町長）  
長根富栄（教育委員長）、新井田秀雄（教育委員）、吉田尚子（教育委員）、松橋一男（教育委員）、櫻田泰弘（教育長）
- ・説明のために出席した者の氏名  
吉田英輔（教育課長）、川村拓己（指導室長）、佐藤良一（教育課長補佐）、澤口俊博（教育課長補佐）、鈴木博文（教育課長補佐）

## 町長あいさつ

(吉田町長)

総合教育会議ですけども、現状から明日という部分を考えながらどうするべきかを考える場になろうかと思えます。六戸町といたしましては、教育力20%アップを掲げており、それは点数ではない。スポーツであれボランティアであれ「総合的に立派な人間」、それを数値に落とすことは難しいのでありますが、現状より20%アップするような人間をつかっていければと思っております。教育的な意味で、地域ブランドとしての教育を語れる六戸町であるなら、それは最強のブランドと言えるのではないかと考えております。

国で行っている学力テスト等見ますと、結果として悪い方ではございません。ただ現状で申し上げますとこの地域の教育力はまだまだ不足しているだろうと感じています。教育力について調査を行って課題を見つけることができればいいのですが、それも難しい。学校にいる時間や家庭にいる時間、その他の要因などその辺の流れはどうなっているのか。学力に対する意欲といいますかそういった部分はどうなっているのか。将来において数少ない子どもであるなら、その子どもたちがより総合的に立派な人間として育ててほしい。

そのために小・中学校が一番重要な年代になってくるのではないかと。オリンピックがあったわけですが、身体的な能力は昔に比べたら他の国に劣らない。メンタルな部分についても強心臓のすごい若者たちが増えてきていると感じています。勉強をしつつ、かつ精神的なものまたは自分の体力というものをしっかりと若い世代に身に付けながら社会に出ていくような子供たちを育てる必要があるのではないだろうか。成功者をみますと、知識だけではないことが感じられます。それは総合的にどんな人間かという部分です。

小・中学校というのは言葉どおりの義務教育の世界でございます。その際に勉学という部分ももう少し総合的に高めて行けたなら、その後において自力で飛躍するような人材が十分に出てくるのではないかと考えています。

将来を決める大事な時期でございますので皆様のお知恵をいただきながら対応できればと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

## 議 事 六戸町教育大綱について

(櫻田教育長)

教育大綱は、昨年度策定されている。その元となっているのは、第4次六戸町総合振興計画「みんなの六戸2020プラン」である。今年3月には第4次六戸町総合振興計画後期基本計画が策定されましたが、それと照らし合わせても手直しするべき事項がありませんでした。したがって大綱の内容については、昨年度策定した教育大綱に変更はございません。

## 議 事 教育大綱の具現について

(櫻田教育長)

施策の基本的な方向性を示すのが「教育大綱の具現」である。昨年度からの変更点についてご説明します。

教育目標では、社会教育を「一人一人の学習機会と社会参加を通じて学びを生かし、つながりを作り出す社会教育を推進します。」とした。

施策の具現の1つ目、確かな学力の育成です。「中学生による裁判の傍聴」は、夏季休業中に実施するよう計画を進めてきた。裁判所を見せるのではなく裁判員裁判を見せたいと思っている。裁判員裁判にも夏季休業が有り、生徒の夏季休業中の実施はできなかった。2学期以降平日にどのような形でできるのか検討中である。

「学力調査結果の町内分析と公表、学校教育へのフィードバック」は、昨年度から全国学力調査結果について、具体的な数値は公表しないが広報ろくのへに掲載している。

「保育園そして幼稚園と小学校の懇談会」は実施している。

「英語教育の推進」は、今後小学校3年生から英語教育が入ってきますので、六戸町としてもただそのまま導入というわけにはいかない。中身を充実させる意味で今年度より「英語教育推進会議」を立ち上げ、英語教育に対する取り組みを強化している。

施策の具現の2つ目、豊かな心の育成です。インターンシップと福祉課で行っているふれあい体験学習を行っている。

施策の具現の3つ目、健やかな体の育成です。安心安全な学校給食ということで、広域で作成したマニュアルをもとに六戸町独自のマニュアルを作成し配布、実施している。

施策の具現の5つ目、イジメ行為の未然防止と早期発見・早期対応です。まず「互いの違いを認め合うこと」、これがイジメを無くす原点だと考えている。足の遅い子、教科によっては不得意な子、それをまず認め合い、言い合うことの無いようにということで文言を追加している。

社会体育では今年度、スポーツ少年団の指導者を対象とした救命講習会を追加している。

## 意見交換

(櫻田教育長)

教育施策上の課題と対策について、六戸町の課題は3つあると考えています。1つ目は「不登校対策」、2つ目は「大曲小学校の学習環境整備」、3つ目は「学力の向上」であります。

まずは不登校対策についてです。年間30日以上病気や経済的理由以外で欠席している子どもは、平成23年度から増加傾向にあります。これを受け、平成24年度から重点的に取り組んだ事項は9つあります。1つ目は、六戸町教育目標の重点取組目標とした。2つ目は、福祉課、学校、教育相談員、児童相談所が連携した個別検討会議を開催し、子どもまたは家庭にどのようなケアができるかを検討している。3つ目は、家庭訪問、連絡方法、別室登校の推奨など各校のきめ細やかな対応策。4つ目は、教育相談員との連携。5つ目は、公的機関での学習機会の確保ということで、図書館等を利用した場合にも出席日数にカウントする。子どもが自分の居場所を教室でも保健室でも図書館でもいい。まずは家から出て、自分の居場所を見つけて学習するよう促している。6つ目は、家庭訪問を含めた登校刺激の実施。7つ目は、県のスクールカウンセラーの活用。8つ目は、不登校対策の行動指針の作成し、全教職員に配布している。9つ目は、いろんな機会不登校児童の捉え方や対応の仕方など学べる環境として教育講演会を実施している。

教育委員会では、いろいろな対策を講じている。小学校では減少傾向にあるが、中学校ではなかなか減っていません。最終的には家庭の問題に教育委員会がどのように携わっていけるのが課題となっております。生徒へは登校刺激などで対応できますが、家庭の問

題を今後どのように対応していくのかというところです。

つぎに、大曲小学校の学習環境整備についてです。大曲小学校学区の人口増加に伴い、平成28年度の各学年児童数から見れば8クラスと特別支援3クラスが必要な状況にあります。平成30年度には9クラスと特別支援3クラスが必要になると予想されます。現在の大曲小学校は6クラスの設計になっており、特別教室を普通教室に転用して使用しております。教室の不足については、校舎と体育館の間に6教室を増設する方向で計画しております。早急な対応が必要となるため、平成29年度には校舎の実施設計、平成30年度には校舎の建設工事、平成31年度からは使用可能にできるようにしようと現在計画しております。

それから3つ目が学力の向上であります。全国学力調査の結果では、小中学校ともに六戸町全体としては悪い方ではありません。しかし、学校を個々に見た場合では、振幅が大きいです。そこが町の課題であります。良い学校はいいですが、そうでない学校は下がるのか、学校によっても良いとき悪いときがある。先生方にも言ってありますが、振幅が大きいいいことは、学校の持つ教育力が高いわけではない。たまたま生徒が良かったとか、たまたま教えている先生がいいということが振幅が大きい原因である。振幅ができるだけ小さく高止まりすることが学校の持つ教育力であると考えています。どんな生徒がいても、どんな先生が来てもある一定の学力保証ができるということになれば、それはまた一歩違ったものになるだろう。これは高等学校では当たり前のことで、進学校でも毎年浮き沈みがあると信頼されなくなり、行かなくなる。中学校も選ばれる時代になっていますから、中学校の先生も小学校の先生も昔と環境が違うということ認識してもらおうよう努めている。以上が課題として捉えてる部分です。

教育のブランド化については、教育力の20%アップということで、昨年度と今年、学校教育では「楽しい学校」づくりをめざし、これを通じて総合的に20%をめざす、社会教育では「芸能活動が盛んな町」、これを中心に捉えながら社会教育の20%アップをめざそうと、社会体育は「町民運動会のある町」、これを起点にしながら社会体育の20%アップを図ろうと取り組んでおります。

学校教育では、楽しい学校づくりということで、誇れるNo.1事業において、発案者による全校生徒の前で趣旨のプレゼンテーションを実施したり、心の教育の実践、外国人との交流事業等々を通じて、郷土愛の育成を図り、町行事への参加機会が増えている。不登校児童・生徒数の対応に地道に取り組んでいますが、大きな成果を生むまでに至っていません。少しずつではありますが、図書室や公的機関で学習する生徒が出てきていることを、今後の指導に活かし、登校へと導きたい。部活動の面では小規模校ながら、県大会・東北大会に出場する児童・生徒も増えている。学業成績においては、ここ数年六戸町としては小・中学校共に郡の上位に位置していますが、各校共に年度によって振幅が大きく、学力の保障面からも課題と捉えています。

社会教育では、芸能活動の盛んな町ということで、文化ホールの自主事業においては、入場者数が前年比較で約700名増加している。今後も、町民が普段接することがないような内容で情操面を高めていきたい。町民文化祭において、来場者数と出展・出演団体数は大きな変動がありませんでした。日頃の学習成果を披露し、町民の学習機会を確保するためにも文化協会と打開策を話し合い、趣旨の達成に努めたい。青年講座において、青年

層の学習機会の確保に向け、平成27年度から積極的に取り組んだ結果、平成26年の2回開催から、平成27年度は10回の開催で参加者は大幅に増えました。受講者の意向を踏まえて内容を検討・開催してきましたが、今後は男性限定の講座内容を魅力あるものにしていく工夫が求められる。IT講習において、講座内容の見直しを図り、スマートフォンやタブレット等の学習ニーズの高い内容とした。講座回数では15%、受講者数では50%の増加となりましたが、機器の進歩の早さと、学習ニーズの変化に対応していくフットワークの軽さが求められる。

社会体育では、町民運動会のある町ということで、平成28年度は一部種目への出場ではありますが参加する町内会が増加しております。新種目として、スポーツ少年団対抗リレーを組み入れることができました。フリー種目を加えることで幅広い年齢層の参加を促すこともできました。平成29年度は、町制執行60周年であり、且つ町民運動会も60回目となることから、更により多くの町民が参加できる方策を探りたい。

(松橋教育委員)

不登校について、中学生になると行動範囲が広がることにより近隣市町村の生徒と仲良くなって学校に行かなくなるということも聞いている。その辺の近隣市町村との連携などは行われているか。

(櫻田教育長)

現在、私たちが把握している不登校の多くは家庭の問題ではありますがいいわけではありません。それは近隣市町村との連絡は取り合ってお互いに情報交換をし対応しています。

(吉田教育委員)

六戸町は学校が北と南に分かれているが、交流がほとんど無いような印象をもっている。学力向上の面でもお互いに交流の機会を増やすことによって刺激が与えられるのではないか。

(櫻田教育長)

小・中学校の連携は、北と南に分かれている。昨年度より交流を図ろうという試みはありますが、本格的には始まってはいません。

(長根教育委員長)

古い話ではあるが、私が中学生の頃は中学校から数名が選ばれて三沢の中学校で一日授業を受けるというようなことが行われていた。教科書が違ってショックを受けた経験がある。私たちの世代でもそういうことが行われていた。ショックというのはすごく大事なことで、自分たちの学校で「井の中の蛙」的なことでは競争にならない。他に引き出されると自分がどれだけなのかを感じることができる。子ども心に「これではいけない」と思った記憶がある。

(新井田教育委員)

私も生徒会の活動ではあるが、十和田の中学校との交流をしたことを思い出しました。勉強ではありませんでしたがそういう経験をしました。

(吉田町長)

実際に六戸中学校と七百中学校という言い方を昔からされるのですが、単純に学校が違うからという面があるが、どうもその保護者のスタンスの違いを感じることもある。六戸中学校学区は安閑としているという言われ方をされる。七百中学校は横の刺激合いというか、保護者間の刺激合いというか、そういう要素があるのではないか。今後も、子ども同士の刺激合いと共に、保護者間の刺激合いを醸成する取り組みが全町的に必要になるのではないだろうか。

それから、成績の面でも総体的な向上ということに関して、英語教育を通してコミュニケーション能力を高めていただきたい。やはり、やり取りするという環境、それは大事なことはないか。発表会や英語ゲームでもいいんですが、六戸町独特の何か各学校が一体となってやるようなものはできないものか。勉強として会話しているのと、ある場所に出て行ってキャッチボール的に会話したのとでは染み込み方が違うのではないか。そういうことをやらせて、単語数を覚えることの前に自信というかそういうものを経験として、だれと会っても動じないような子どもを育てるようなイベント的なものもアイデアとしてどうなのか。

(櫻田教育長)

この件については、町全体の取り組みになりますので先ほど説明しました「英語教育推進会議」に話してみます。

(吉田町長)

子どもたちが授業じゃないところで自分の考えたことを言葉にできるということ、その体験は大きいと思う。自信を持てる子どもを育てていきたい。